

# 大学入学者選抜方法および入学者の属性と適応状況

山村滋, 鈴木規夫, 濱中淳子 (大学入試センター)

周知のように, わが国では大学入学者の選抜方法多様化政策が採られている。しかしながら, 多様化した入試制度が全体として成功しているのかに関しては分析が行われていない。本稿は, 大学1年生を対象とした『高校の科目履修と進路設計等に関する調査』データを用いて, 多様化した入試制度を評価するための一環として, 大学入学者選抜方法および入学者の属性と適応状況との関係について分析したものである。

## 1 はじめに

周知のように, わが国では大学入学者の選抜方法多様化政策が採られている。様々な選抜方法において多様な組み合わせで試験が実施されている (山村ほか 2007a)。この多様な選抜方法の効果・妥当性に関しては, 各大学の入試委員会・担当者等により, 個別大学ごとには, 熱心に研究がなされてきている。そして, そこでは主に選抜方法と入学後の成績との関係が分析されてきた。しかしながら, 各大学のレベルを超えて, マクロなレベル, すなわち一国の大学入学者選抜制度という観点から見た場合, 入試の多様化は成功しているのかという重要な点について, 十分な検証が行われてきたとは言いがたい。

ところで, 大学生の学力低下が社会的に大きな話題・問題となったことは記憶に新しい。柳井(2002)らは, こうした背景の下に, 「大学生の学力低下によって, 大学生の学習意欲の低下, 学生が在籍する専攻分野への不適応, さらに, 大学での学習活動の低下等」を「懸念」し, 「大学生の学習意欲を専門分野への適応状況や大学での学習活動と結びつけ」(柳井, 2002: 1)た全国的な調査研究『大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究』を行っている。残念ながら柳井らのこの調査研究は, 選抜方法と学習意欲等との関わりについては, 彼らの問題意識の外に置かれていたためか, 分析されていない。しかしながら, 入試制度

研究という観点からは, 重要な研究課題である。

本稿は, この柳井らの研究を踏まえて, 選抜方法および入学者の属性と専門分野への適応状況との関わりを 2006 年秋に実施した全国の大学1年生を対象とした調査データを分析することを課題とする。それは, わが国の多様化した大学入学者選抜制度を評価しようとする試みの一環である。

## 2 データ

本稿で利用するデータは, 大学入試センター研究開発部試験基盤設計研究部門が 2006 年秋に実施した, 『高校の科目履修と進路設計等に関する調査』(以下「学生調査 2006」とする)の回答に基づくデータセットである。同調査は, 2006 年度時点で設置されている全国の大学・学部のなかから 600 学部を単純ランダムサンプリングによって抽出し, 当該学部の大学1年生各 100 名を上限として回答をお願いしたものである。476 学部より, 36,584 名分の回答が得られた。このうち, 海外の高校出身者や回答が不備なもの等を除く 35,662 名分が本データセットである。なお, このなかには大学2年生以上の回答も含まれている。今回は大学1年生, 34,802 名分を分析に利用する。

## 3 分析の視点と順序

本稿では、上述のように学生の適応状況と選抜方法との関係を分析する。その際に、適応状況に関しては、柳井ら（1993, 2002）によって作成・利用されている学生への以下の 8 つの質問項目を利用する。

問 あなたは、現在、所属している大学の専門分野（学部・学科）についてどう思っていますか。各項目についてあてはまる番号を 1 つ選んで マークして下さい。

1. 自分の性格にあっている
2. 自分の興味・関心にあっている
3. 自分の能力を生かすことができる
4. 高校時代の得意科目を生かすことができる
5. 希望する職業に就くことができる
6. 自分の求めている生き方ができる
7. 現在の専門を学んでいることを誇りに思う
8. 新しく自分の専門を学び直せるとしてもやはり現在の専門を選ぶ

これらについて、そう思わない=1、あまりそう思わない=2、ある程度そう思う=3、そう思う=4、として得点化した。

柳井らの 1993 年の調査研究において、8 項目間の相関係数はすべて正であり、主成分分析によると第 1 主成分の寄与率は 44% であることから、8 項目の得点を加算して適応度得点を求める根拠が示されている。

ところで適応度は、能力・適性を判定する選抜による部分と、学生が入学後に各大学での学生生活によって形成されると考えられる<sup>1)</sup>。「学生調査 2006」では、大学 1 年生を対象としている。大学での在学期間は半年程度であることから、この段階の適応度においては「選抜」の結果の部分が大きなウェイトを占めていると考えてよいであろう。

また、そうであるならば、高校ランク、高校の出身学科、大学ランクなどの入学者の諸属性も、適応度となんらかの関わりがあるのではないかと考えられる。そこで、選抜方法と適応度との関係を分析する前に、大学入学者の諸属性（高校ランク、高校の出身学科、

大学ランク）と適応度の関係について、まず、分析しておこう。次に、選抜方法との関係について分析を進めることにする。

なお、大学ランク、高校ランクはともに以下のように 4 段階とした<sup>2)</sup>。ランク 1：偏差値 60 以上、ランク 2：偏差値 50 以上 60 未満、ランク 3：偏差値 40 以上 50 未満、ランク 4：偏差値 40 未満。

また、選抜方法（入学方法）については、一般入試、推薦入試、AO 入試、付属校等からの内部推薦・内部進学（以下、内部進学とする）、その他に分類した。

#### 4 学生の適応状況の指標化

まず、学生の適応に関する 8 つの項目を主成分分析にかけ、今回の調査データに柳井と同様の方法がとれるのか否かについて確認する。

主成分分析の結果、分散の 54% を説明する一つの主成分が得られた<sup>3)</sup>。それぞれの項目の主成分負荷量は「得意科目を生かせる」が 0.54 でやや低い、他は 0.7 以上の値が得られた。また、信頼性の指標である  $\alpha$  係数は 0.872 であった。柳井(1993)によると、主成分負荷量はこの項目をのぞいてほぼ 0.6 以上の値を示し、また  $\alpha$  係数は 0.804 であったので、今回のデータも柳井が収集したデータと大きな相違はないと言える。したがって、この 8 つの項目の和得点を適応度の指標として用いることにする。

つぎに、柳井ら(1993, 2002)にならい、適応度の得点に基づいて、低適応群、中適応群、高適応群の 3 群に分けた（表 1）<sup>4)</sup>。

表 1 適応度得点の分布

適応群	適応度得点	度数	%
低適応群	8-18	6548	19.4
中適応群	19-26	19501	57.9
高適応群	27-32	7030	22.7
合計		33079	100.0

## 5 学生の属性と適応状況

### 5.1 設置形態と適応度

表2は、設置形態別の各適応群の分布を集計したものである。設置形態別に見ると、私立に比べて国立と公立で、高適応群の割合が高く、低適応群の割合が低い。

表2 設置形態と適応度

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
国立	15.1	59.6	25.2	100.0	6980
公立	15.1	58.7	26.2	100.0	3187
私立	21.3	57.2	21.5	100.0	23542
全体	19.4	57.9	22.7	100.0	33709

### 5.2 大学ランクと適応度

表3は大学ランク別の適応度の分布である。大学ランク別に見ると、ランクが高いほど高適応群の割合が大きい。ランク1では35%が高適応群であるが、ランク2、ランク3、ランク4では、それぞれ23%、22%、16%と減少していく。一方で、低適応群の割合は、逆にランクが下がるほど増加する。ランク1では11%であるが、ランク2、ランク3、ランク4ではそれぞれ17%、20%、28%と増加している<sup>5)</sup>。

表3 大学ランクと適応度

ランク	低適応	中適応	高適応	合計	人数
1	10.5	54.4	35.2	100.0	3205
2	17.3	59.5	23.2	100.0	11325
3	19.7	58.2	22.1	100.0	13746
4	28.4	55.6	16.0	100.0	5433
全体	19.4	57.9	22.7	100.0	33709

### 5.3 設置形態別・大学ランク別の適応度

5.1節で、適応度は、私立の方が相対的によくないこと、5.2で適応度は大学ランクと関わりがあることがわかった。では、設置形態別かつ大学ランク別に見た場合、いかなる関係が成り立つのであろうか。表4は設置形態別・大学ランク別の適応度について集計したものである。この表によると、大学ランク

1では、公立—私立—国立の順に高適応の割合が減少している。低適応に関しては、同程度といってもよいであろう。大学ランク2では低適応・高適応ともに同じ程度である。大学ランク3では、公立で高適応の割合がやや高い。大学ランク4では、国立・公立がないので比較できない。

柳井(2002)は、設置形態別の適応度の集計から、高適応群の割合は、国立—公立—私立の順に少なくなっていくことを指摘していたが、大学ランクをコントロールすると、必ずしも私立で高適応群の割合が相対的に少ないとは言えないのである。

表4 設置形態別・大学ランク別の適応度  
大学ランク1

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
国立	10.2	58.4	31.5	100.0	1547
公立	7.9	49.7	42.4	100.0	483
私立	11.9	51.1	37.0	100.0	1175
全体	10.5	54.4	35.2	100.0	3205

大学ランク2

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
国立	15.8	60.4	23.8	100.0	4563
公立	16.3	62.0	21.7	100.0	2072
私立	19.3	57.6	23.2	100.0	4690
全体	17.3	59.5	23.2	100.0	11325

大学ランク3

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
国立	20.5	57.8	21.7	100.0	870
公立	16.8	54.9	28.3	100.0	632
私立	19.8	58.4	21.8	100.0	12244
全体	19.7	58.2	22.1	100.0	13746

大学ランク4

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
国立	—	—	—	—	—
公立	—	—	—	—	—
私立	28.4	55.6	16.0	100.0	5433
全体	28.4	55.6	16.0	100.0	5433

### 5.4 高校ランクと適応度

表5は高校ランクと適応度の関係を示したものである。この表からわかるように、高校ランクにかかわらず中適応群の割合はほとん

ど同じであるが、ランクが下がるごとに高適応群の割合が減少し、低適応群の割合が増加する傾向が見られる。

ここから、高校段階で、適応度に影響を与える要因が形成され、それは、いわゆる学力と同様、高校ランクに一定程度規定されているものであることが示唆される。

表5 高校ランクと適応度

ランク	低適応	中適応	高適応	合計	人数
1	16.8	57.6	25.6	100.0	12308
2	19.8	58.2	22.0	100.0	11807
3	23.4	58.3	18.3	100.0	6657
4	26.6	56.3	17.2	100.0	704
全体	19.5	58.0	22.5	100.0	31476

なお、大学ランクと適応度の関係（表3）と高校ランクと適応度の関係（表5）を比較すると、大学ランクの上位に、より高適応者が集中している。これは、大学ランクの上位校が、高校全体から、より適応度の高い集団を選抜した結果であると考えられる。

### 5.5 出身高校学科と適応度

表6は出身高校学科と適応度の関係を示したものである。普通科、職業科<sup>6)</sup>、総合学科に関しては、ほとんど各適応群の割合に関して差がみられない。一方、理数科、および英語・体育・芸術科では、高適応群の割合が高いのが注目される。

表6 出身高校学科と適応度

学科	低適応	中適応	高適応	合計	人数
普通科	19.4	57.9	22.7	100.0	29172
職業科	21.8	59.0	19.3	100.0	1765
総合学科	22.2	58.4	19.5	100.0	699
理数科	16.2	56.2	27.6	100.0	733
英語・体育・芸術	17.2	52.2	30.6	100.0	697
その他の学科	18.2	59.5	22.3	100.0	561
全体	19.4	57.9	22.7	100.0	33627

### 6 選抜方法と適応状況

以上を踏まえ、次に選抜方法と適応状況に

ついて分析を進めよう。表7は選抜方法別に適応度の分布を集計したものである。

表7 選抜方法と適応度

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
一般入試	18.6	58.0	23.4	100.0	19418
推薦入試	19.5	59.2	21.3	100.0	10055
AO入試	24.1	51.7	24.3	100.0	1992
内部進学	23.0	56.5	20.5	100.0	1113
その他	22.5	55.4	22.1	100.0	879
全体	19.4	57.9	22.7	100.0	33457

選抜方法別に見ると、低適応群の割合が低いのは、一般入試であり、その割合が高いのは、AO入試、内部進学である。一方、高適応群の割合が高いのは、一般入試、AO入試であり、その割合が低いのは、推薦入試、内部進学である。

以上から、一般入試は、低適応群が相対的にやや少なく、高適応群の割合がやや高い、という傾向を指摘できる。推薦入試は、高適応群の割合がやや少ない。低適応群については平均的な割合であると言える。AO入試については、低適応群と高適応群の割合がともにやや高いという2極化傾向がある。また、内部進学については、低適応群の割合がやや多く、高適応群の割合がやや少ないという傾向が見られる。

さらに大学ランク別に選抜方法との関わりを検討すると以下のような傾向が見られる（表8）。

ランク1では、一般入試、推薦入試では、傾向はほぼ同様である。AO入試では、高適応群の割合が、一般・推薦に比べて11~13ポイント程高い。ただし、AO入試で入った者は全員で67名であり、一般入試、AO入試に比べてサンプルが少ない点には留意が必要である。また、内部進学においては、低適応群の割合が、一般・推薦・AOに比べて5~7ポイント高い。

ランク2では、一般入試に比べて、推薦入

試・AO入試において低適応群の割合が小さく、高適応群の割合が高い。一方内部進学に関しては、低適応群の割合が大きく、高適応群の割合が小さい。

ランク3では、AO入試において、高適応群の割合が高い。また、内部進学で、低適応群の割合が高くなっている。

ランク4では、AO入試において低適応群の割合が高い。また、内部進学では、高適応群の割合がやや小さい。

表8 選抜方法と適応度（大学ランク別）

大学ランク1					
	低適応	中適応	高適応	合計	人数
一般入試	10.3	55.0	34.7	100.0	2661
推薦入試	8.7	54.5	36.8	100.0	310
AO入試	10.5	41.8	47.8	100.0	67
内部進学	15.9	48.5	35.6	100.0	132
その他	22.2	50.0	27.8	100.0	18
全体	10.5	54.4	35.2	100.0	3188

大学ランク2					
	低適応	中適応	高適応	合計	人数
一般入試	18.3	59.4	22.4	100.0	8304
推薦入試	14.3	60.1	25.6	100.0	2258
AO入試	10.3	60.1	29.6	100.0	243
内部進学	20.4	59.9	19.8	100.0	319
その他	18.8	57.1	24.1	100.0	133
全体	17.4	59.5	23.1	100.0	11257

大学ランク3					
	低適応	中適応	高適応	合計	人数
一般入試	19.8	58.2	22.1	100.0	6996
推薦入試	19.2	59.7	21.1	100.0	4948
AO入試	18.4	53.5	28.2	100.0	778
内部進学	23.5	56.2	20.2	100.0	425
その他	22.5	52.3	25.2	100.0	480
全体	19.7	58.2	22.1	100.0	13627

大学ランク4					
	低適応	中適応	高適応	合計	人数
一般入試	29.5	54.8	15.7	100.0	1457
推薦入試	26.1	57.9	16.0	100.0	2539
AO入試	33.6	48.6	17.8	100.0	904
内部進学	29.5	57.0	13.5	100.0	237
その他	24.6	60.9	14.5	100.0	248
全体	28.4	55.6	16.0	100.0	5385

## 7 おわりに

以上、本稿では、大学での適応状況に関して、入学者の諸属性および選抜方法という観点からの分析を試みた。

大学入学者の諸属性と適応度との分析からは、適応度が高校ランクや大学ランクと関わりのありそうなことが示唆された。したがって、わが国の高校や大学がいわゆる学力によって階層化されていることに照らすならば、適応度と学力は一定の相関があるのではないかと考えられるのである。

また、選抜方法との関係では、内部進学制度は、相対的に低適応の学生を多く輩出しやすい選抜方法と考えられる。また、AO入試は、とりわけ大学ランクが下位の大学においては、低適応の学生が出やすい選抜方法と言えよう。

なお、推薦入試やAO入試は、出身高校のランクが相対的に高くない者や普通科以外の学科出身者に、利用されている（山村ほか2007b）。しかし、大学ランクが下位の大学において、低適応の学生が出やすい選抜方法がAO入試であるとする、AO入試による教育機会の拡大と適応との間にはトレードオフの関係があることが示唆される。

以上のような本稿での分析結果を踏まえ、「学生調査2006」での、高校時代の履修経験・科目選択経験や受験科目、内発的な学習態度や大学での学びへの意義付け、価値志向等や高校で身につけた能力・技能等に関する調査結果も組み込み、選抜方法との関係性の分析を深めることが今後の課題である。

## 注

- 1) 柳井(2002: 63, 66)によると、高適応群の比率は、1年生と4年生が同程度に高く、2年生がもっとも低かった。また、低適応群の割合は、1年-4年-3年-2年の順に低かった。
- 2) 大学偏差値、高校偏差値については、それぞれ、駿台予備校(2006)、関塾教育研

究所(2005)によった。

- 3) 8項目間の相関係数は、すべて正であった(表省略)。また、表9に8項目の主成分分析を示す。

表9 8項目の主成分分析

	第1成分
性格合致	0.762
興味等合致	0.805
能力生かせる	0.778
得意科目	0.539
就きたい職業	0.700
生き方	0.774
誇り	0.754
現在の専門	0.733
寄与率	54%
$\alpha$ 係数	0.872

- 4) ただし、柳井(2002)の場合は、低適応群：25%、高適応群：26%としてあり、本稿の方が低適応群・高適応群の範囲をやや限定的にしてある。
- 5) 大学ランクが下がるとともに、高適応群の割合が減少し、低適応群のそれが増大することは、不本意入学による不適応の可能性もあると考えられる。
- 6) 周知のように高校の学科は、高等学校設置基準に基づき、①普通教育を主とする学科、②専門教育を主とする学科、③普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科に大別される。そして、②にはいわゆる職業高校で設置されているたとえば工業に関する学科の他に理数科や体育学科等も含まれる。そこで本稿では、これらを区別するために、農業科、工業科、商業科、水産科、看護・福祉科、家庭・家政科を職業科として扱うことにする。
- 7) なお、表10、表11に示すように、高校での校内成績(英数国に関する5段階の自己評価の合計点)と適応度にも正の関係がみられる。

表10 高校校内成績と適応度

高校成績	低適応	中適応	高適応	合計	人数
上位	15.1	54.7	30.3	100.0	6006
中位	18.6	59.7	21.8	100.0	19285
下位	25.0	55.8	19.1	100.0	7600
全体	19.4	57.9	22.7	100.0	32891

表11 高校校内成績と適応度(高校ランク別)

高校ランク1

高校成績	低適応	中適応	高適応	合計	人数
上位	13.1	52.7	34.3	100.0	2260
中位	16.2	59.5	24.3	100.0	6984
下位	20.9	56.8	22.3	100.0	2825
全体	16.7	57.6	25.7	100.0	12069

高校ランク2

高校成績	低適応	中適応	高適応	合計	人数
上位	15.4	55.5	29.1	100.0	6006
中位	18.7	59.8	21.4	100.0	6997
下位	26.1	55.9	18.1	100.0	2632
全体	19.9	58.2	21.9	100.0	11531

高校ランク3

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
上位	18.6	57.3	24.1	100.0	1222
中位	22.2	60.1	17.7	100.0	3733
下位	30.5	54.8	14.8	100.0	1490
全体	23.4	58.3	18.3	100.0	6445

高校ランク4

	低適応	中適応	高適応	合計	人数
上位	20.1	57.9	22.0	100.0	159
中位	27.8	55.8	16.4	100.0	353
下位	30.8	57.4	11.8	100.0	169
全体	26.7	56.7	16.6	100.0	681

文献

関塾教育研究所(編)(2005).『最新版 全国高校・中学偏差値総覧』株式会社関塾.  
 駿台予備校(編)(2006).『大学選びの決定版! 大学受験ガイド』(2007年度版)高橋書店.  
 山村滋・鈴木規夫・佐藤智美(2007a).「多様な大学入学者選抜方法の実態分析」『大学入試センター研究開発部リサーチノート』RN-07-17.  
 山村滋・鈴木規夫・佐藤智美(2007b).「多様な大学入学者選抜方法と大学教育の機

会『大学入試センター研究開発部リサーチノート』RN-07-19.

柳井晴夫（編）（1993）.『大学の各専門分野の進学適性に関する調査研究報告書——大学入学者選抜資料としての適性検査のための基礎研究』大学入試センター研究開発部.

柳井晴夫（編）（2002）.『大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究』大学入試センター研究開発部.